

日本における京劇：その演目と俳優

濱, 一衛
九州大学名誉教授

<https://doi.org/10.15017/9802>

出版情報：中国文学論集. 4, pp.8-18, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

日本における京劇

—その演目と俳優—

濱 一 衛

はしがき

京劇の日本来演は大正八年の梅蘭芳東京出演が最初である。鈴木豹軒先生は「梅劇はシナ劇の我邦に入りたる起初」(鈴木「品梅記」六五頁)といわれ、能の評論家坂元雪鳥は「横浜や長崎などは別として、東京の大劇場に始めて出したシナ芝居が：」(「新演芸」大正八年六月号)といわれる。となると明治年間に一度も京劇の上演はなかったことになるが、坂元氏の言のように居留民の上演は当然あり、留学生達の上演のあったことも、春柳社の人々の記録によって明かである。しかしこれらは中国人向けで、日本人向けの公演は大正八年がはじめということである。以下出演順にその演目と俳優名とをあげてゆく。勿論資料不足で遺漏は少くないと思われるが、今後の補遺をまちたいと思う。

一 梅蘭芳(大正八年五月)

梅氏の東京帝国劇場初出演は大正八年五月のことで、「私は以前から、こんな希望をもっていた、それは中国の古典劇を国外に紹介し、国外観衆のそれに対する看かたを知りたいということである。それでわたしはこころよくこの招聘をうけいれ、しばしの準備時間の後、劇団をひきいて日本に行った」(梅蘭芳「戲劇散論」二四三頁)といい、また「経費はすべて私自身が集めた」(梅蘭芳「東遊記」三三頁)といい、目的は経済観点からではなく、中国古典芸術伝播の第一炮であったという。この帝劇出演の意気、ごみのなみなみならぬことがわかるのである。事実梅氏はこのあと第二炮として一九三〇年に米國、第三炮として一九三五年に蘇聯に行つて京劇を演じている。

帝劇の演目の第一、本朝二十四孝(先代幸四郎の横藏、先代勘弥の慈悲藏)。第二、現代劇、五月の朝女優劇)。第三、アラビア古典劇、

呪(幸勲女優連)。第四、シナ劇。第五、新曲、娘獅子。ということ梅氏は五つの演目の中の一つを分担するかたちであった。小さい梅氏の旅行劇団で全演目を演じて薄味になるより充実したものを看せて間違いないようにしたのである。

演目

天女散花 奇如山作。伽藍は如来の命で、天女のところに行き、維摩のところで花を散らして病を見舞うようにたのむ。美しい舞が中心。天女梅蘭芳、伽藍趙醉秋、維摩詰高慶奎、文珠師利貫大元。

醉貴妃 絃索調「醉楊妃」。百花亭で玄宗を待つが、梅妃のところへ行ってしまふ。貴妃は二力士にたすけられ御園で酒をすこし、種種の嬌態を演ずる。これも舞の要素が多い。楊貴妃梅蘭芳、裴力士(姜妙香)、高力士高慶奎。

牡丹亭 明、湯顯祖、牡丹亭第十齣。崑曲「遊園驚夢」。杜麗娘が庭の花園に遊び、夢に若き秀才の柳夢梅が現れる。杜麗娘(梅蘭芳)、春香(姚玉芙)、睡魔神(貫大元)、柳夢梅(姜妙香)、花神(高慶奎)、老夫人(趙醉秋)。

黛玉葬花 清、曹雪芹、紅樓夢第二十七回下半、「埋香塚黛玉泣殘紅」のところ。賈宝玉(姜妙香)、茗烟(貫大元)、林黛玉(梅蘭芳)、紫鵲(姚玉芙)、襲人(趙醉秋)。

御碑亭 清、廬夜雨伝奇に出づという。妻がとある御碑亭に雨をさけ、そこに柳生春がいたと知った王有道は妻を離縁する。後、それが誤りであるとわかり復縁する。この演目が日本では一番喜ばれたと梅氏はいふ(梅蘭芳「戲劇散論」)。王有道高慶奎、孟月華(梅蘭芳)、王淑英(姚玉芙)、孟德祿(趙醉秋)、柳生春(姜妙香)、孟明時(貫大元)、孟夫人(董玉林)、申嵩(高連奎)、趙衆賢(何喜春)、姚文奎(李玉芝)。

千金一笑 紅樓夢第三十一回上半、「撕扇子作千金一笑」のところ。一名「晴霖撕扇」。宝玉(姜妙香)、晴雯(梅蘭芳)、襲人(姚玉芙)。武家坡 龍鳳金釵伝に出づという、征東全伝の物語り。平貴は十八年ぶりに大功をたてて帰郷し、武家坡で久々の対面をする。薛

平貴(貫大元)、王宝川(梅蘭芳)。

遊竜戯鳳 綴白裘第十一集、卷三、椰子腔「戯鳳」。正徳遊竜宝巻。明の武宗が大同に遊び李鳳姐の美しさにひかれて妃とする。一名梅竜鎮。正徳皇帝(高慶奎)、李鳳姐(梅蘭芳)。

奇雙会 吹腔(崑曲に似る)。褒城県令趙冲の妻桂枝は半屋よりきこえる涙声から父が無実の罪で入獄していることがわかる。そこで巡按使に特赦を願ひ出ると、その人は永年別れていた弟であった。禁卒(趙醉秋)、李奇(高慶奎)、丫環(董玉林)、李桂枝(梅蘭芳)、阮公(高連奎)、趙冲(姜妙香)、李保蓮(姚玉芙)、胡巡撫(貫大元)。

思凡 明、無名氏、孽海記。崑曲。趙氏法名色空、人の世にあこがれ袈裟を捨てて下山する。趙色空(梅蘭芳)。

西廂記 崑曲「拷紅」。西廂記第四本第二折。老夫人は紅娘を呼び、鶯鶯と張珙とのことを責めるが、紅娘は却つて老夫人の破約をなじる。張珙(姜妙香)、紅娘(梅蘭芳)、鶯鶯(姚玉芙)、老夫人(高慶奎)。

嫦娥奔月 淮南子。搜神記。天界の物語り、嫦娥は后羿の練った薬をぬすみ食うを知られ、月宮にのがれ広寒仙子となる。齊如山作。後羿(高慶奎)、嫦娥(梅蘭芳)、吳剛(賈大元)、仙姑(姚玉芙)、仙姑(姜妙香)

蘇三起解 警世通言第二十四回、妓女蘇三(玉堂春)は冤罪で太原にひかれてゆく、その途中護送役人に身の薄倖をうったえる。一名女起解。解差(趙醉秋)、蘇三(梅蘭芳)、獄吏(賈大元)。

虹霓関 隋唐演義に出づつというも見えないようである。虹霓関の守将辛文礼は王伯当に射殺される。文礼の妻東方氏は王を生擒にするが、その英俊なるにまけて結婚する。辛文礼(高慶奎)、家将(趙醉秋)、辛夫人(梅蘭芳)、丫環(姬玉芙)、秦瓊(賈大元)、王伯当(姜妙香)。

以上が帝劇の演目で、演芸画報などによると、天女散花は五月一日より五日、御碑亭は六、七、八日、黛玉葬花は九、十日、虹霓関は十一日、醉貴妃は十二日とある。其の他の演目はいつ上演したかはつきりしない。なお神戸上演の演目は不明であるが、大阪のものは、五月十九日、二十日の両日で、場所は大阪中央公会堂、演目は、十九日は第一思凡、第二空城計、第三御碑亭。二十日は第一琴挑、第二烏竜院、第三天女散花である。

空城計、三国志演義第九十五回。孔明が空城の計で敵をあざむく。

琴挑 明、高濂、玉簪記、第十六齣寄弄。潘必正は尼陳妙常の部屋を訪い、互いに琴を弾じて思いをうったえる。陳妙常(梅蘭芳)、潘必正(姜妙香)

烏竜院 水滸伝第二十一回、「宋江怒殺閻婆惜」、水滸記第二十三齣「殺惜」。宋江、閻婆惜、張文遠のこと。宋江(賈大元)、閻婆惜(趙醉秋)、梅氏は毎日第一と第三とを勤めた。初日の空城計の孔明は、御碑亭の王有道が高ならば賈大元であらう。

俳優

梅蘭芳(青衣、花衫) 原籍は江蘇泰州、祖父梅巧齡は名女方、伯父兩田は名琴師。八才よりこの道にいり十一才初舞台、二十才になる前に名優の列に入る。皮黄の師は吳菱仙。四大名旦(四人)の女方(四人)の筆頭で他を圧していた。美しく整った顔、甘く円い天賦の美声、不世出の女方である。古装劇をつくり、崑曲を復興した。日本が中国に暴圧を加えたころ隠退したかたちでヒゲを蓄えたのは有名な話である。晩年全国人民代表大会代表をはじめ多くの要職についた。一八九四〜一九六一。

姚玉芙(青衣) 江蘇籍、八才より賈麗川に老生を学び、後に青衣となり梅蘭芳を師とする。声は唱い出しはよい。配角の人である。一八九六年生。

高慶奎(老生) 高四保(丑)の子、十一才より賈麗川につく、各派の長をとり雑学のそしりを受く。無類のノドを持っていたが、晩年駄目になり、舞台を退いたまま歿くなる。日本に来たころは上海行きに成功して地位のたかまったところである。長く座頭の地位を

守った。一八九〇—四二年。

姜妙香(小生) 河北河間の人。崑旦姜麗雲の子、青衣で人氣のあつたのを十八才の冬に嗜血してより小生に転じ、陸杏林、馮蕙林の指導をうける。梅蘭芳の相手役としてかかせぬ人、女方風がぬけないのが欠点であつた。一八九〇年生。

賈大元(老生) 賈紫林(武旦)の子、余叔岩や賈麗川について学ぶ。富連成科班ができたとき梅氏と一緒に座頭で迎えられた。梅氏の相手役を長くつとめたが、晩年は二牌にあまんじた。一八九七年生。

趙醉秋(丑) 天女散花の伽藍淨、牡丹亭の老夫人(老旦)黛玉葬花の襲人(花旦)をしていゝように何でもしているが、女起解の禁卒をしていゝので丑であらう。

董玉林(旦) 御碑亭の孟夫人(老旦)、奇雙会の丫環(旦)をしていゝので一応旦としておく。

何喜春(青衣) 北京人、何二格(丑)の弟、富連成の出身、途中より青衣となる、配脚の人。

李玉芝(不明)

胡琴 茹萊郷。 鼓師 何斌奎。

この時の演目は三種にわけられる。すなわち御碑亭のような伝統の演目、思凡のような当時梅氏が北京で復興に努力した崑曲、そして千金一笑のような梅氏のはじめた古装劇である。自分の持駒を全部披露して、日本の看衆に批判を求めたのであつた。その結果は熱狂的な歡迎となつたのであつた。演技陣の方は姜、高、賈、姚と大事なところは堅めてあるにしても如何にも弱い感じである。下の方の人は何でもやらされていゝ氣の毒といゝほかはない。

二 趙碧雲(大正八年八月)

大正八年八月一日より大阪浪花座で、日支合同大演芸会ということで京劇を上演している。梅氏一行の成功を見ての企画であらう。日支合同の日本の方は長唄は長唄芳村伊十郎、杵屋六左エ門、三味線杵屋寒玉。また常磐津は兼太夫、都太夫、佐喜太夫、三味線岸沢仲助、岸沢式部という錚々たる人々で趙碧雲の引立役としては立派すぎるほどである。初日の演目を並べると、第一常磐津廓八景、第二長唄筑摩川、第三常磐津お染久松土手場、第四長唄二人椀久、第五常磐津式三番叟、第六長唄連獅子、第七常磐津関の扉、第八長唄勸進帳、第九シナ劇湖中美といゝぐあい日本側の演目は毎日大差なく京劇は毎日がわりである。松竹関西演劇誌によると大阪のあと神戸の中央劇場に出演している。

演目

初日 湖中美 正徳遊竜宝巻に出づるか。明の正徳皇帝が西湖に遊んだとき鄧宝珠なる美女と歌のやりとりをするといゝ物語り。

正徳皇帝(唐維初)、鄧宝珠(趙碧雲)。

二日目 王允献貂蟬 三国志演義第八回。元無名氏連環計。明、王濟、連環計等。漢の献帝のおりの奸臣董卓、忠臣王允、歌妓貂蟬の物語り。董卓(馮滿順)、王允(謝宝池)、貂蟬(趙碧雲)。

三日目 唐明皇遊月宮殿 唐、白楽天、長恨歌。清、洪昇、長生殿第五十。貴妃を失い追慕の情やみ難き明皇は方士の導きで天上の廣寒宮に至つて再会する。明皇(唐維初)、方士(謝宝池)、貴妃(趙碧雲)。

四日目 金蓮戲叔 水滸伝第二十三回。明、沈璟、義俠記、戲叔。武松の兄武大郎の妻金蓮は同居の武松を誘惑し、はね返される。と其のことを悪しざまに武大郎に告げた。武松(謝宝池)、金蓮(趙碧雲)。

五日目 氣宣王 漢の宣帝が苗妃一族のために危かつたが、賢明な皇后蘇氏並びに其の兄弟のために救われて天下太平となる。蘇氏(趙碧雲)。

この一座は八月十六日より十五日間、東京吾妻座に出演するが、梅氏の帝劇のときのように歌舞伎の一座で三つの演目の中の一つを演じている。即ち、第一平家女護島、第二シナ女優劇、第三乳房榎、である。歌舞伎の出演者は大阪の福圓を別格に書き出し、歌門、座頭菊右エ門という中芸居である。演目は十五日間に五種とある。内容は不明ながら東京朝日の劇評に金蓮戲叔、武松打虎が見えているからおおよそは大阪での五種かと想像がつくのである。その評にただ「珍」とあり、余程めづらしいもの思われたらしい。

俳優

趙碧雲 五十年北平戲劇資料、民国十年五月一日のところに、中和園出演の崇雅神社の連名に見える、名のある人のいない一座の而も中程に位する人である。一座の人にしても手元にある資料では名は出て来ない。以下其の連名を記しておく。

綠芙蓉、劉彩鳳、小蝶仔、(以上女優)

謝宝池、陳一文、唐雄初、鄧福貴、郭月渡、謝福、徐安、馮順濱、趙國強(以上男優)

三 梅蘭芳 (大正十三年十月)

今度は帝劇改築記念興行で、第一史劇神風。第二淨瑠璃紅葉宴衛士白張。第三西國巷談。第四シナ劇。とある。第二は大倉男米寿賀宴にのみ淨瑠璃源氏十二段を上演したとあるから、米寿のことや改築のことがあつて梅蘭芳が特に出演したのであろう。狂言のたてかたは大正八年の時と同様で、四つの演目のうちの一つが京劇といふかたちである。

十月二十日、麻姑献寿 齊如山作。清、調元樂伝奇に出づといふ。天界のこと、西王母の誕生日に麻姑はその寿を祝して百花酒を

奉る。古装劇。麻姑(梅蘭芳)、王母(姚玉芙)

十月二十一日、廉錦楓 齊如山作、鏡花緣第十三回、上半、「美人入海遭魚網。孝女廉錦楓は母のため海に入り海參をとる。一日、隣國の漁人の網にかかり売られようとするのを林之洋らに助けられ、恩に感じて巨珠を贈る。廉錦楓(梅蘭芳)、林之洋(李春林)。

十月二十二日、紅線伝 齊如山作。唐、楊巨源、紅線伝、明、梁辰魚、紅綫女雜劇。薛嵩は田承嗣の攻撃をおそれている。腰元紅線は田の寢室に忍びこみ金盒を盗んで驚かせる。薛嵩(未定)、紅線(梅蘭芳)、田承嗣(霍仲三)。趙通(未定)、李固(未定)。

十月二十三日、醉楊妃 大正八年上演。楊貴妃(梅蘭芳)、裴力士(姜妙香)、高力士(羅文奎)。

十月二十五日、麻姑獻壽 十月二十日上演。

十月二十六日、奇雙会 大正八年上演。李桂枝(梅蘭芳)、李奇(喬玉林)、趙冲(未定)、保童(姚玉芙)。

十月二十七日、審頭刺湯 明、李玉、一捧雪。明代の奸相嚴嵩に贖物の一捧雪という玉杯を献じた莫懷古はそれが湯勒の言で露見すると、友人の戚繼光が忠僕莫成の首を身代りにさし出す。その首をめぐる話は展開し、ついに雪艶は寢室で湯を刺す。雪艶

(梅蘭芳)、陸炳(未定)、湯勒(羅文奎)、戚繼光(札金奎)。

十月二十八日 醉貴妃 前出。

十月二十九日 虹霓閣 大正八年上演。辛文礼(霍仲三)、東方氏(梅蘭芳)、王伯党(姜妙香)、侍女(姚玉芙)、秦瓊(札金奎)、家将(羅文奎)。

十月三十日 二十二日分。

十一月一日 二十一日分。

十一月二日 御碑亭 大正八年上演。王有道(未定)、孟月華(梅蘭芳)、王淑英(姚玉芙)、楊生春(姚妙香)、孟徳祿(羅文奎)、孟父(札金奎)、孟母(孫甫庭)、申嵩(陳少之)。

十一月三日 二十九日分。

十一月四日 黛玉葬花 大正八年上演。林宝玉(姜妙香)、林黛玉(梅蘭芳)、茗煙(羅文奎)、襲人(姚玉芙)。

俳優

梅蘭芳(青衣、花衫)、姜妙香(小生)、姚玉芙(青衣) 以上大正八年上演。

陳喜星(老生) 星は興にもつくる。富連成科班の出身、時慧宝(老生)を学ぶ。出科当初はさえなかつたが、四十才ごろはノドがさえていた。梅氏が老生の筆頭としてつれて来たのだから、このころもよかつたのであろう。一九〇〇年生。

朱湘泉(武生) 朱桂芳の兄、よく共演した。武旦朱文英の長子、福寿科班の出身。中等の武生。

朱桂芳(武旦) 立廻りは勇猛のうちに柔媚さがある。扮像は美しく、きまりの形も美しい。うたは声が低いが台詞ははっきりしている。姚玉芙と同じく長く梅氏の一座にいた。一八九三年生。

札金奎(老生) 張春彦、鮑吉祥とならんだ二流の立役。孫甫庭(老旦)庭は亭にもつくる。名旦孫怡雲の子、龔雲甫の弟子、一九三、四〇年代には北京老旦の先輩格になっていた。可もなく不可もないという人。一九〇五年生。

羅文奎(丑) 青衣羅巧福の子、丑羅百歳の弟。 霍仲三(淨) このころ文明園で演目のはじめに唱う程度の人である。

韓金福(小生) 当時将来のある若手であった。 賈多才(丑) 太っていて変な声を出し、芸は俗、能戯は多い。

朱斌仙(丑) 斌慶社科班に九才入科、十六才出科、老生より丑となる。十数年後には一流の丑となる。

董玉林(旦) 前回も来演。 李春林(老生)、陳少之(老生)、喬玉林(崑曲老生)、張蕊香(花旦)、孫少山(老生)

胡弓 徐蘭元 鼓 何斌奎。

この度の演目には崑曲がないが、喬玉林がいるので、東京以外の時に崑曲が出たのであろう。前回ほどの意欲は見られないが、その後の新作を出したり、前回歓迎されたものを出したりして、ごく確実なやりかたかと思われる。俳優にしても高慶奎、賈大元がないで陳喜星あたりを起用していて老生陣が貧弱に見えるが、その代り朱桂芳がいたり、孫甫庭、賈多才、朱斌仙と並べると、脇はずつとしっかりしている。或いは今回の方がよいともいえるかも知れない。

四 綠牡丹(大正十四年七月)

帝劇ではいままでの京劇の場合と同じく、いくつかの演目の中の一つを綠牡丹にやらせる形成で、今度は女優劇を第一部として五つならべ、第二部をシナ劇として十三日間上演している。東京のほか、宝塚、福岡、長崎、京都に出演している。次の演目では風塵三俠が彼自身の新作であるほかは全部が伝統的な京劇ばかりである。花旦系を中心に武旦、青衣までやっている。黄鶴楼では反串で周瑜をやったのであろうか。女方の出るところはないから。

演目

初日 風塵三俠 唐人小説：虬髯客伝、明、張鳳翼、紅弘記、明、馮夢竜、女丈夫など。羅嬰公：風塵三俠は程硯秋のためにつくったものであるが、黄のものも大同小異であるという。李靖が江を渡って楊素に見ゆるところよりはじまり、虬髯客が國を去るを、紅弘が劍の舞をして送るところで終る。

二日 穆天王 楊家將演義第三十六回。昭代簫韶。穆桂英は宋將楊宗保を生けどりにして結婚する。宗保の父の延昭は宗保を助けにゆくが、落馬させられてしまう。

三日 鴻鸞禧 古今小説、金玉奴棒打薄情郎。今古奇觀第三十二回。秀才莫稽は乞食頭の娘金玉奴と結ばれ、科挙にも通り赴任するが、途中その結婚を後悔して河中につき落す。稽が後に見合いたした相手が玉奴で、彼女は鞭で打って責め、兩人元のさやにおさまる。題の鴻鸞禧は劇のはじめに鴻鸞星君が出場するからである。

四日 黄金台 打花鼓 黄金台、明、張伯起、灌園記。明、馮夢竜、新灌園。など齊の潘王は鄒妃と宦官伊立の意のままになる。伊立は世子田法章が鄒妃にたむれたと讒言して、これを捕えにゆく。

打花鼓 某公子出遊して打花鼓の夫婦にあい唱わしたりからかつたりする。吹腔、もと弋腔という。この日の黄のだしもの。

五日 虹霓関 大正八年梅蘭芳。

六日 花田錯 一名花田八錯。水滸伝桃花村のことに出づるか。劉員外の娘玉燕のために腰元春蘭が花田のまつりでえらんでおいた婿を、迎えに行つた下男がほかの男をつれて来て大騒動となる。

七日 宝蓮灯 元人雜劇、沈香太子劈華山。沈香宝卷。羅州の州官劉彦昌には先妻の子に沈香、後妻王英の子に秋兒があつた。沈香が学校で誤つて人を殺すが、その罪を二人がともにかぶろうとする。それを王英はわが子に罪をおわせる。

八日 烏竜院 一名坐樓殺惜。水滸伝第二十一回、宋江怒殺閻婆惜。水滸記第二十三齣、殺惜。宋江、閻婆惜、張文遠のこと。

九日 探陰山 汾河湾 探陰山 七俠五義第三十四、五回よりの換骨脱胎という。柳金蟬が李保に殺され、その死体は顔慎敏の家の前におかれる。その疑を包拯が解決する。

汾河湾 大正八年梅蘭芳。

十日 空城計 大正八年梅蘭芳。

浣花溪 西川節度使崔寧の妻は魚氏、任蓉郷は妾であつたが、浣花溪で部下の謀反があつたとき任は大いに働き見事鎮定して、衆將より夫人に推される。

十一日 打魚殺家 おおよそは後水滸「太湖収漁税」のこと。梁山伯の豪傑蕭恩は一同帰順の後も漁夫としてくらす。それを土地の悪紳が漁税をとろうとするので大暴れする。

十二日 遊竜戯鳳 大正八年梅蘭芳。

十三日 黄鶴楼 三國志演義第四十五回。元人雜劇、劉玄德醉走黄鶴楼。周瑜は黄鶴楼に宴を設け、劉備と趙雲が出席する。荊州のことで口論となり、二人は策を以て危機を脱する。

俳優

緑牡丹(青衣、花衫) 即ち黄玉麟のこと、父は前清の知事、緑牡丹のような芸名は当時でも少い。威艶冰(緑牡丹)の父より譲られたと

いう。師匠は戚艶冰。一九二〇年上海に出て名声上る。一九二三年帝劇出演の子定が地震でのびたという。一九二四年北京で王瑤郷の門に入る。一九〇七年生。

一座については上海の俳優とて資料がないので、連名を記するにとどめる。賽三勝(文武老生)、筱鴻声(正工老生)、程桐春(小丑)、小李長勝(花臉)、張金鄉(小生)、沈玉山(花臉)、劉燕庭(老生)、小狸猫(小丑)、黃壽麟(老生)。琴師 張葵祥。鼓師 張國珍。

五 十三旦 (大正十五年四月)

四月二十六日より四日間、大阪辨天座に男女優七十余名ということで出演している。演目より見て予劇のみで独立して出演したものと考えられる。六時開演一回、第三日のみ昼夜二回。入場料四円、三円、二円、一円とある。

演目

一日目 狸猫換太子 元、無名氏、抱妝盒。明、姚茂良、金丸記。三俠五義第一―四十二回。上海の文武老生常春恒らが初演。題は宋の真宗の李妃が狸猫を生むが、実際は劉妃が李妃の生んだ皇子とすりかえるという意。李劉二妃の事績を中心に包公の一代記ともいうべき長編である。

二日目 同続編。

三日目ヒル 查頭関 漢の太子劉唐建が太后の命を奉じ、尤家関まで来る。その女将尤春風が漢の太子と知り跪いて封を求め、二人の間に愛情が生れる。越虎城 東征史劇とある。武家坡 大正八年梅蘭芳。

饅頭庵 紅樓夢第十五、六回。秦鍾と宝玉は兄の柩を饅頭庵に送り、そのの尼智能と密会する、秦の父が知り二人はついに自殺する。

三日目ヨル 花木蘭替父從軍 古くは花木蘭辞があり、明、徐渭、雌木蘭(四声狼のうち)がある。梅氏の演ずるは齊如山作である。

四日目 梁武帝 上海の女優碧雲霞の初演。梁武帝の妃孟瑞雲が郁皇后に毒殺され、墓中で太子を生む。

十三旦一座は五月二十八日に大阪松竹座において、映画「我が子」七巻と同時に「天女散花」を上演している。この一ヶ月の間のこと不明。

天女散花 大正八年梅蘭芳。

俳優

十三旦 彼女の来演について大阪朝日大正十五年四月二十七日、黒根生署名入り記事に「シナ女優が日本へ来たのははじめてである」とあるが、すでに趙碧雲の来演のあったことは前述の通りである。同じ記事に「外国人のこんな多人数の迷子は恐らく前例を

見ない。まして彼等は奉国戦争に出合つて一部の座員と新調の衣裳道具とを北京に置き去りにして云々」とある、何か困難な事情があつたらしい、次の小楊月楼の来演と時日が相接しているのも不思議である。

椰子の名女方十三旦との関係は不明、十三旦姓は劉、名は昭容、はじめ椰子花旦、後に京劇になる。宣統年間漢口、民国後入京、太原にも多年出演、その全盛時代は女優の立役恩晚峯(その娘恩佩賢は十三旦の弟子)の相手役時代の十年で「貞艶親王」といわれた。来日は二十八才というから、その後数年にして北京に歿したことになる。一八九四—一九二八年。

その一座の連名は、楊擲泉、麒麟仙、胡满堂(堂一に金をつくる)、張永喜、馬俊舫、鏡芙、榮魏青、張素卿(張一に馬につくる)、李玉安、菊農。

六 小楊月楼 (大正十五年四月)

四月二十八日より三十日まで三日間、東京歌舞伎座に出演、歌舞伎との共演でなく京劇のみの出演である。

初日 三国志翼州城 第六十四回。馬超が翼州城を落して後、歴城を攻め、敗れて翼州城に帰るが、城に入ることもならず、馬の妻子も殺される。

四郎探母会夫人 楊家将第四十一回。楊四郎は遼に捕えられてから駙馬となる。弟の六郎は改めて宋の元帥となつて攻めてくるので、同じく出陣してくる母に会う。四郎探母は、坐宮、盗令、出関、見母、回令とつづく。

西遊記金刀陣 西遊記とあるも征西演義という。取经の後、孫悟空は南極仙翁を助けて金刀陣を大破する。

花木蘭従軍 大正十五年十三旦。

二日目 花蝴蝶 七俠五義第六十六、七回。大盗花蝴蝶姜永志は婦女をはずかしめていたが、包拯の部下に驚齋楼で捕えられる。

南天門 尚書曹正邦らは帰郷の途中広華山で大雪にあい、玉女だけが生き残り、忠僕の曹福も凍死する。福死して南天門都土地に封ぜられる。彈詞後倭袍に出づるといふ。

西遊記蟠桃会 王母が蟠桃大会をするのに招待しないのを怒つた悟空は桃は盗む金丹は食うで大騒ぎとなる。

狸猫換太子 大正十五年十三旦。 三日目 三国志黃鶴楼 大正十四年緑牡丹。

三国志空城記 大正十四年緑牡丹。西遊記大鬧宮 蟠桃会のと李天王との大立廻りとなる。

白蛇伝金山寺 清初人、雷峰塔伝奇 許仙が金山寺にまいったとき、法海は許仙の妻白氏が白蛇の化身であるといふのでかえさなかつた。白氏はそれで水族をあつめて金山寺を水攻めにする。

毎日最後の演目が小楊月楼の演目である。狸猫換太子のほかは伝統京劇であるが、演出は上海風のにぎやかなものであつたのであろう。

俳優

小楊月楼 名武生楊月楼との関係は不明。民国十年ごろまで老生として活躍していたが声がわりしてから花旦となる。青衣も小旦もやるという。東京出演のときは女方時代であったことはいまでもない。とりわけ封神榜の妲妃が有名であった。唱いすぎで声をいためて、民国十九年ごろは天蟾舞台の周信芳の一座にいた。

他の座員については不明であるが、松竹大谷図書館所蔵の初日の上演劇目には翼州城のみ配役がのっている。参考までにしるしておく。張銘武(馬超)、鄭連奎(龐德)、李逢南(韋康)、劉春臣(楊阜)、葛華卿(梁寬)、將伯舟(趙衡)、張鎮奎(馬岱)、張玉高(姜叙)で、この中で葛華卿は民国十九年、上海天蟾舞台に出っていた周信芳一座の丑角筆頭として出演していた。これから見ると武小生の張銘武、副浄の劉春臣も相当の人であったのであろう。

小楊月楼の一座は東京のあと五月四日より九日まで大阪中央公会堂に出演、主催は中華衛興団、後援は中日協会とあり、入場料は階下は五円、四円、三円、階上は三円、二円、一円とある。以下紙幅の関係で演目だけ列記する。初日、長板坡、座宮、盗令・見娘、泗州城、全本金山寺。二日目、花蝴蝶、金刀陣、古城会訓弟、貴妃醉酒、全本狄青招親。三日目、白門楼、月下斬貂蟬、蟠桃会、全本狸猫換太子。四日目、二本虹霓関、惡虎村、芭蕉扇、七擒孟獲。五日目、連環套盜御馬、三本鉄公鷄、機房訓、大売芸、全本石頭夫人成親。六日目ヒル、安天会、南天門、招賢鎮、全本芸娘。同ヨル、八大鎚、武家坡、甘露寺、廻荊州、蘆花蕩。

あとがき

この記録も大正年間にとどまったが、明治には一回の来演もなく、昭和も今度の敗戦まで一回もなかったことは興味の深いことである。戦後になると昭和三十一年の梅蘭芳と中国京劇院第三団、三十九年の中国京劇院第四団の来演となる。さきのにべた大正年間の京劇は歌舞伎や新派にまた舞踊に種々の影響をもたらしたが、これらについては稿を改めて述べようと思う。

最後に前記の上演演目についてまとめておくと、演目数は一〇九、重複するものを除いて八九、四回上演のものが虹霓関、三度が貴妃醉酒、空城計、天女散花、武家坡で上演頻度の多いものは筋の分りやすいものであり、また三国、水滸、西遊記などに重複したものが多く、そういう日本人になじんだものより特にえらんでいるからであろう。俳優から見ると、六回は女方四回、女優二回というかたよったもので、立役や実悪のものが一回もない。言葉の関係から、形容のよいものということで、かくは相成ったのであろう。大正年間の京劇はそのおもしろさの一面を示したにとどまったのである。